

文京学院大学 2022 年度入学式

2022 年 4 月 2 日 東京ドームシティホールにて

## 学長告辞

ここ文教地区にも、草木が芽吹く待望の春を迎えることができ、新たな門出に相応しい季節となりました。

本日はご来賓の方々のご臨席を賜り、新入生の皆様と共に令和 4 年度の入学式が挙行できますことは、私ども教職員にとって大きな喜びであります。新入生の皆様、ご入学、誠におめでとうございます。また、本郷キャンパスあるいはご自宅から視聴されているご家族をはじめ、これまで新入生を支えてこられた関係の皆様にも心よりお祝い申し上げます。誠におめでとうございます。

過去 2 年間、この入学式をここ東京ドームシティホールでは開催できず、各キャンパスから、各学部別に行われました。本年の入学式は何とかこれまで通り、この会場で執り行うことができました。残念ながら、保護者の皆様にはこの会場へは参加できませんが、本郷キャンパス内の教室からまたご家庭からご視聴いただいております。また、新型コロナウイルス感染症対策のため、午前と午後に分けて 2 学部ずつで執り行うことになりました。全て参加者の皆様の安全を考えた上でのことと、ご理解を賜りたいと思います。

本日午前の開催は、人間学部と保健医療技術学部の合同での入学式となりましたが、人間学部新入生 309 名、大学院人間学研究科新入生 15 名、また保健医療技術学部新入生 276 名、大学院保健医療科学研究科新入生 16 名、大学院看護学研究科新入生 4 名となります。皆様、ようこそ、文京学院大学に入学されました。教職員・在校生一同、皆様の歓迎申し上げます。

さて、一昨年 4 月に緊急事態宣言が発出されてより今日まで対面授業・オンライン授業・両者を併用したハイフレックス型授業を行ったりとその時々感染状況を踏まえた形での授業運用がなされてきました。今後も感染状況を見ながら皆様をはじめ教職員など関係者の安全を考えながら進めていく予定であります。ただ言えることは「何があっても教育の質は落とさない」ということでもあります。この点は是非ともご安心いただきたいと思います。

これまでの歴史を振り返ると、人類の歴史は、感染症と共にあったということが出来ます。100 年ほど前までは、感染症で次々に人が倒れても、ひたすらその流行が過ぎるのを待つしかありませんでした。しかし、今回、原因不明の肺炎が発見されてから僅か数週間で新型コロナウイルスであることを突き止め、ゲノム解析でウイルスの全遺伝子配列が特定され、そして今までにない短期間でワクチンが開発され、すでに多くの人が 3 回目のワクチン接種を終えております。さらには重症化を防ぐ飲み薬まで開発されております。これは私たち人類が有史以来、不断の努力によって創造してきた「科学 (サイエンス)」の成果に他なりません。その一方で、科学だけでは、このウイルスを完全に克服するところまでには至っていないのも事実であります。その意味では人類は今しばらくウイルスの完全なる克服と科学の発展を見守っていかなければならないところです。

ところで、皆さんが入学された文京学院大学は私立大学ですが、私立大学には「建学の精神」というものがあります。すなわち、大学を創立した創立者は、どのような理念で大学を設立したのか、またどのような学生を育て、どのような人材を世に輩出したいと考えたのか、という精神が必ずあります。

本学の建学の精神は「自立と共生」です。

本学は、大正 13 年に創立者・島田依史子先生によって創立されました。前年の大正 12 年に関東大震災が起り、自立する力も何も持たない女性たちが苦勞するのを目の当たりにして、いかなる時も男女に関係なく自立できるようにと、創立者・島田依史子先生は「女性に自立の力を」という建学の精神を掲げて本学を創立しました。この時、島田依史子先生は若干 22 歳でした。それ以降、その精神を継承しつつ、常に時代の一步先を見つめながら、「女性」から「人間」へと視点を広げ、今日では人間としての「自立と共生」を建学の精神として教育活動を展開しております。現在は、東京都文京区に本郷キャンパス、埼玉県ふじみ野市にふじみ野キャンパスがあり、外国語学部、経営学部、人間学部、保健医療技術学部の 4 学部と大学院としてそれぞれの研究科および看護学研究科の 5 研究科が設置されています。

本日のこの入学式には、駐日カンボジア王国特命全権大使であるトゥイ・リー (Mr. Tuy Ry) 閣下にもお忙しい中、ご臨席をいただきました。

本学とカンボジア王国との関係を申し上げると、本学では 2024 年に迎える学校法人文京学院創立 100 周年を目指して「B's ビジョン 2024」を策定し、その中の一つに長期プログラムとして「新・文明の旅」プログラムを企画し実施しています。このプログラムは、ユーラシア大陸を東ヨーロッパから中国そして朝鮮半島までを 3 年に 1 度、2~3 週間の行程で 2~3 か国を訪問し、それぞれの国の風土や歴史に触れながら同世代の現地学生と交流し、多様な文化や歴史を学ぶとともに、学生が日頃学び身に付けた事柄を伝え、交流するというものです。第 1 回目は 2012 年に実施され、ルーマニア・ブルガリア・トルコを訪問、第 2 回目は 2015 年に実施、ラトビア・リトアニア・ポーランドの 3 か国を訪問しました。第 3 回目は 2018 年に実施、カザフスタン・ウズベキスタンを訪問しました。なお、今回のロシア政府によるウクライナへの侵攻行為は、本学がこれまで築いてきた旧ソビエト連邦のラトビアなどの国々との交流あるいは若い世代の学びや願いを打ち砕く許しがたい行為です。この点より本学では 3 月 11 日付けで理事長・学長連名でロシア政府の武力によるウクライナ侵攻に強く抗議する旨の声明を HP に発信しましたので、是非ご覧いただきたいと思います。更に、日本政府はポーランドに避難しているウクライナ避難民の日本への受け入れに動き出しているようです。本学ではこれまでも新・文明の旅プログラムの中で、（ポーランドなどの旧ソ連エリアの国々を訪問し、）リトアニアで迫害を受けるユダヤ人にビザ発給のサインをし続けた杉原千畝による人道支援の重要性を学んできています。学んだその精神を実際の行動に表すべき世界の情勢であると判断し、本学では文京区と連携を取り一定規模のウクライナ避難民の受け入れを表明しています。しかも住居の提供だけではなく、子供からお年寄りまで、その精神面や身体的なケアを大学各学部の専門性を活かして教職員学生が一丸となってサポートしていきたいと考えています。

第 4 回目は 2021 年に実施する予定で、そこではカンボジア・タイ・インドネシアの 3 か国を訪問する計画でございました。残念ながら新型コロナウイルスの世界的な感染拡大により、実際の訪問はできませんでしたが、3 か国に関する事前学習等はこれまで通り行ってまいりました。本日もご臨席いただきお

りますカンボジア王国も訪問予定国の一つで、これまでも大使館のご協力により前大使のウン・ラチヤナ閣下による講演会の開催などが実施されてきました。そのようなご縁により本日の入学式のご臨席と後程ご祝辞をいただくこととなりました。本学ではこの他にもロンドン芸術大学との共同プログラムや埼玉県岩槻人形協同組合とのコラボレーションによる現代風の祢雛の開発、岩手県釜石市との連携協定に基づく東日本大震災の被災地復興支援のための活動など多くの事業を手掛けております。そしてこれらの拠点となる「まちづくり研究センター」、通称「まちラボ」も本郷キャンパス内に開設されております。

このように本学は国内の大学との連携はもとより海外大学、地方都市、そして地元である文京区やふじみ野市など多くの機関と連携したプログラムを多数用意しています。これは本学が昨年大学開学30周年を迎え、新たにブランドタグラインである「共に育つ、わくわく悩む」を作りましたが、これは前向きにあるいは積極的に活動して悩む学生に対して教職員をはじめ、先輩学生や地域・社会・企業などと連携して共に学生の成長に関わっていくことを宣言したものです。どうか、新入生の皆さんは入学後は是非、大学や大学で学ぶ学問と結び付けた様々なプロジェクト、そして長期や短期の海外留学やインターンシップなどにも積極的に参加してみてください。

つぎに、皆様のお手元に會津八一先生の「学規」を入学の記念に配布させていただきました。會津八一先生は孤高の歌人、昭和の三蹟といわれ、歌と書に高い評価を受ける美術学者で早稲田大学教授として東洋美術史学の充実に尽力されました。この「学規」は大正3年、先生が34歳の時に先生の家の下宿していた門下生のために示した心得の四則ですが、その内容は勉強時間の決まりでも勉強法のアドバイスでもありません。人生を愛し、教養を深めることが大事であると教えられています。ある時、これを先生の家玄関に飾っておいたところ、自殺を決意した青年が訪ねて来て、じっと見ているうちに翻然（ほんぜん）と悟り、生きる希望を抱いて帰って行ったという逸話があるほどです。2代目学院長の島田和幸先生は、新入生の人生を、少しでも豊かなものにしてほしいとの願いを込めて、毎年、新入生にこの「学規」を贈られました。第22代文化庁長官で前東京芸術大学学長の宮田亮平先生も長官室や学長室にこの「学規」を掲げていたそうです。

その四則ですが、第一に「ふかくこの生を愛すべし」、これについて島田和幸2代目学院長は「生まれて、今日、若くして存在する事の有難さ・・・なんたる貴重なこと。無限の可能性。これからどうにでもわが人生を開拓し得る、すばらしく、未来を今、しっかり手にしている」と、そして「今日までの数々の偉大な人類の文化遺産は、すべて人間が作り出したものです。皆さんはこれからの人生を生きていくためにも、大志を抱き、夢を描きながら、自らを磨いていってください。それが生を愛するという事です。」と述べられています。

第二に、「かえりみて己（おのれ）を知るべし」、これは「己を知る事は最もむずかしい。人間は一生、己を追求していく。そこから新たな目標が生まれ、それを更に超える努力が出発（はじまる）」「未熟なる事の自覚、それが成長の出発点である」と述べられています。そして「反省、謙虚さ、自分がしてほしくない事を人に対してもしない」「これが省みて知るべき己のポイントである」と述べられ、「そこから、この世に己自身が存在しているという尊厳をふまえた、進歩進展の謙虚な営みが始まる」といわれております。

第三は「学芸を以って性（せい）を養ふべし」、「養う、とは栄養を与え磨き育てること・・・で」す。

学芸とは学問と芸術のことで、人文、社会、自然科学（の）あらゆる（ことを）学び習うべきこと」「勉学、考える力、技術、色彩、リズム、文章などによるあらゆる意味での美の創作表現、・・・（これら）すべてが私たちの心の糧となり、これらが個性豊かな人間をつくりあげる根底である」といわれております。「人間の性は生まれつきもあろうが、放っておいては磨かれない。・・・よくなるも、悪くなるも磨き次第、ダイヤモンドは磨かなければ光らない。人間の性を磨くものは学芸である」と述べられております。

第四は、「日々新面目あるべし」、この点について、「今日の自分は昨日の自分と同じか、違う、もし全く同じであるならば2年後の自分も全く変わらぬ筈（はず）、2年前の自分とは違った今日の自分。」と述べられたうえで、「今日の日は昨日とは違う新しさがあり、明日はさらに今日とは違う新しさ加わるように、一日一日が自分にとって新たなる向上の連続でありたい」と記されています。

以上が、皆さんに配布した「学規」の四則に対する島田和幸2代目学院長の解説の一部です。どうか後程さらに時間をかけて何度も読み返してください。きっと皆さんにとって充実した4年間、2年間になることでしょう。

そして、大学として最大限の支援を致しますので、絶対に卒業するという強い意志を持って勉学に励んでください。

結びに、新型コロナウイルスの感染拡大が続く今、また世界の平和が脅かされようとしている今だからこそ、力強く生き抜く力を身に付けるべく、有意義な学生生活を送ることを念願し、告辞いたします。

本日は、誠におめでとうございます。

2022年4月2日  
文京学院大学  
学長 櫻井 隆